

テクスト論と量子力学

鈴木雄史

近代文学研究におけるいわゆるテクスト論は、一頃よりは大々的な表看板として掲げられることが少なくなつた。その分テクスト論的観点が常識化したとも言えようし、流行が去っていく兆候だと歓迎するむきもあろうが、テクスト論の投げ掛けた問題は規模と局面を変えて反復していく予感がある。

多くの（あるいは全ての）問題は積み残しとその再燃、再々燃を繰り返して、それが歴史を作るのかもしれない。ただ、テクスト論、とくに読者や読書行為の問題に関しては、それ自体が、既に先行していたある問題が問題系を変えて転生したものではないかという幻想のような実感が私にはあり、そのことが今後とも反復するという予感を強める。

先行していた問題とは、量子力学という観

測問題である。所詮素人の生噛りであり、難解な数式は自信を持ってここに引用できないので、消化できたと思える範囲で言うと、二十世紀初頭に成立した量子力学は、その発展過程で確かな物理的実在という古典的信念をうち砕いた。微細な素粒子の世界では、粒子そのものをありのままに知ろうとしても、それは様々な状態の確率としてしか把握できず、確率をもつて記述される様々な状態のうちどれか一つに決めるのは、それを見る者すなわち観測者なのだ、という。

素粒子のレベルにおける存在は波動性と粒子性の二面を持つ。波動として見ると、一定の振幅の中における、異なる確率を持った様々な点の集合がもの存在形態である。しかし、それを粒子として見ると、ある一点に

しか存在せず、他の点に存在する確率はもちろんゼロとなる。では、波動的に見たときのような存在の可能性の中から、ある一点に粒子の存在を決定するのは何かといえ、観測するときの光のあて方なのである。波動的には可能性の束のような波状のものが、粒子として観測しようとして光をあてた途端に、一点に収縮して存在する。しかも、どの点に収縮するかは、サイコロを振るように確率的に決まるのである。（詳細は岩波新書・並木美喜雄著『量子力学入門』とそこに挙げられた参考文献を参照されたい。）

この話を素粒子のみならずあらゆる世界に敷衍していけば、存在や現象は客観的にあるのではなく、人間が観察し記録することによってはじめて現象として存在する、というこ

とになる。物理学者の中にもミクロとマクロを短絡させて、「記録」される以前に「現象」はない」などと挑発的に言う人もいるらしい。

観測問題は、量子力学が客観的実在を否定するに伴って生じた論理的矛盾のことである。たとえば、波動性と粒子性の二面はあまりに排他的で、両方を同時に知ることができないというのは、理論としての未熟さを指摘されてきた。波状に散らばっていたものが、粒子と見た途端に確率的に存在可能性のあったある一点に存在を決める。これでは、サイコロを振って存在を決定するようなものだ。そんな無気味なことが本当にありうるのか。アインシュタインが「神様はサイコロ遊びはしない」と言って猛烈に反発したのは、物理学の方では有名だそうだ。

これが文学だったらどこかで聞いた話であって、いわゆるテキスト論では、文学を多様な読みの可能性を秘めたものとして見るとき、これを「テキスト」と呼び、ある一定の枠の中で文学を読んで解釈し、特定の像を持つものとして見るときは「作品」と言う。可能性の集合であるテキストは量子力学で言う波動に、一定の像を取ることでは他の像を否定する

作品は粒子に、それぞれひどく似ている。私が見るの幻を紡ぐきっかけは、こんなところにある。人間は分野が違っても同じ問いに向き合い続けてきた。あたりまえと言われてしまえばそれまでだが、妙に胸に響く事実ではある。あるいはこの種の問題は二十世紀の問題であって、どこかで個人をこえた時代の力が働いているのか。

観測問題はもう半世紀以上繰り返し噴出してきたが未だ決着はつかず、その一方、原理的問題を未解決のままに棚上げした状態で、量子力学は発展し応用されて成果を挙げてきたという。

その転生たるテキスト論も、それが常識化しようとも、あるいは後退しようとも、テキストと作品の二重性に決着など、そうやすやすとは付かないのではないか。おそらく量子力学と同じようなスパンで、それとは重なりつつも少しずれて、問題の再燃、再々燃を繰り返すのではないか。それでいながらテキスト論的な発想やテーマは、原理的には未解決なものを抱えつつも、プラグマティックに利用されていく……

そんな幻想を確実な予感として、暖めていく。

第十八回・文芸科賞募集

(1) 内容

A・創作部門（詩歌・小説・エッセイなど）

B・論文部門（テーマは自由）

※ いずれも未発表作品（活字になっていないもの）に限る

(2) 枚数 四百字詰め原稿用紙二十枚以内

(3) 資格 文芸科在學生

(4) 締切り 平成八年一月三十一日
(水) 正午

(5) 提出先 文芸科資料室

(6) 入選発表表 平成八年三月刊行
予定の『文芸論叢』第32号誌上

(7) 入選者表彰 平成八年の文芸学会で

(8) 賞品 賞状および記念品

(9) 審査員 文芸科専任教員